



それは趣味なのか研究なのか

神戸大学 経済経営研究所

特命講師 内種 岳詞

趣味の定義として、「仕事・職業としてではなく、個人が楽しみとしている事柄」もしくは「どういうものに美しさやおもしろさを感じるかという、その人の感覚のあり方」が挙げられる。例えば、私の趣味の1つに、レーシングカート（以下カートと略する）がある。カートは、モータースポーツの1種で、レースと呼ばれる上位入賞を目指す競技があり、また、車両をレンタルしコースを周回走行する楽しみ方もある。車両を購入すると50万円以上の費用がかかるが、車両をレンタルする場合は数千円で走行できる。カートの構造は、車両としては単純で、フレームにエンジン、タイヤ、ブレーキ、シート、ペダル、ステアリングなど、走行・操縦に必要な最低限のパーツで構成されている。車両の大きさは、全長約1.6メートル、幅約1.4メートルと小さく、また車高は数センチメートルしかない。体が地面の上すれすれを移動することや風を感じることで、時速80km/hで走行すれば体感速度は倍の160km/hに感じられる。また、走行後に起こる筋肉痛は、まさにカートがスポーツであることを物語っている。このように、カートは誰もが手軽にモータースポーツの醍醐味を味わうことができる趣味であると言える。

趣味のカートとの出会いを語るために、少しだけ私の大学生・大学院生時代を振り返る。私は大阪大学工学部の学生時代、体育会自動車部に所属していた。自動車部は、市販の乗用車で競技を行う部活で、参加した競技の1つであるラリーでは、乗用車に走行距離(m)と走行時間(sec.)を計測する専用のコンピュータを取り付け、走行の正確さを競う。たとえば、平均15.0km/hと競技主催者から指示されれば、1.0km区間を240秒ちょうどで走行しなければペナルティが与えられる。また、ラリーは一般公道で競技を行うので、交通法規を遵守しなければならない。つまり、遅れている場合でも法定最高速度を超過すれば警察に厄介になるだろう。私は、このラリーという競技が好きだった。つまり、学生時代にカートはまだ趣味ではなかった。趣味としてのカートとの出会いは、博士後期課程の頃で、よく一緒にドライブに出かける友人に誘われたのがきっかけだった。カートは乗用車とは別物で、スピードメーターをはじめとする計測器は一切ついていない。また、公道ではなく閉ざされたコースを走行するため、ラリーのように決められた時間で走る必要もなく、制限速度もない。当時は、走っている間の自由がうれしかった。

こうしてカートが趣味だと語ると、私が単に車を運転するのが好きなのだと思うかもしれない。しかし、趣味にどっぷりと浸かったことのある人ならわかるだろうが、趣味

に没頭しているときは日常ではない。買い物や旅行を目的に車を運転するのは、私にとって2本の足を動かして通勤している日常とかかわらず、運転そのものをおもしろいと思えないのである。また、速度制限なしに運転したいのかと考えると、ラリーも好きでカートも好きというのは、矛盾しているように見える。速度制限に捕らわれたラリーと速度制限なしに走れるカートでは状況がまるで異なる。そこで、ラリーやカートのことをさらに振り返ってみると、実は、ラリーでおもしろいと思ったのは、走行距離と走行時間を計測する専用のコンピュータを電子工作することや、競技主宰者として競技者の走行を計測することであった。また、カートでおもしろいと思ったのは、車の調子に合わせて走行方法を工夫し周回タイムを短くすることや、GPSセンサーを付けて走行軌跡を取り比較することだった。そう考えると、実験・観測・考察などをするという、研究に欠かせない要素が私にとっておもしろいと思うものなのだと気づく。

一般的に「研究が趣味」ですと主張すると、とんでもない批判を受ける。なぜなら趣味とは、冒頭で述べたように、仕事・職業として行うものではない。その点において、研究が趣味だとは口が裂けても言えない。私にとってカートは「研究」ではなく「趣味」なので、当然ながら自腹でレンタルして楽しんでいるし、GPSセンサーなども自腹で用意したし、また成果発表の義務もない。そんな折、研究の手段としてカートを利用している先生に出会った。その先生は、研究費でカートもGPSセンサーも購入している。当然ながら研究者は、カートを利用した実験を研究成果として報告する義務を持つが、どう走るかは自由だし、実験を繰り返す必要から、走行記録も蓄積されて達成感も得られる。私も計測に参加し、実験に協力した。「趣味が研究」ということは、なんと素晴らしいことでしょう。なお、カートを利用した研究は、カートを走らせることが目的ではなく、カートを運転する人間の技量を走行データから推定することが目的であったことを申し添えておく。

近年の情報共有速度と技術普及速度の爆発的な増加により、一部の人しか知りえなかったことが一日のうちに常識となり、また一部の人しかできなかったことが誰でもできることになってきた。このような状況で、個人ができることも多種多様になり、研究分野の多様化だけでなく趣味も多様化しているように思える。そう考えると、個人の趣味で行う活動と研究活動とは完全に分離するが不可能であることに気付く。しかし、ここまでお読みいただいた方には、研究（仕事）が趣味（個人の楽しみ）では困るが趣味（個人の楽しみ）が研究（仕事）なのは困らないことは理解いただけるだろう。2017年度が皆様にとって多くの趣味を発見し、かつ、趣味が仕事に昇華する年になることを切に願います。